

杏子試文

……この軀（からだ）がいったん外に出ると彼の腕にすがりつかずには歩けないことを思うと、彼はまた杏子の病気の揺がしがたさを見せつけられて、今まで疑ってみたこともない軀というものの現実味への信頼を逆に揺がされた。杏子と並んで帰り道をたどっている、彼は自分の軀が重みを失って、後ろへ置き残されていくような奇妙な感じを覚えた。すると、人の流れの中で自分のありかを確かめて方向を見定めていくことが、すこしばかり困難に感じられた。そんな彼の腕に、杏子が一心にすがりついている。ところが、駅の構内で《さよなら》を言うと、杏子はとたんに一人立ちになって、彼の存在などすこしも必要としないように、頭をコトンと垂れて真直に歩み去っていく。

ある日、いつものように杏子と軀を並べて横たわっているとき、彼はとうとう同じ事の繰返しに耐えられなくなって、天井の暗がりにもつかってつぶやいた。

「僕のカン、君をどうすることもできないらしいね。僕が君のそばにいなくなりさえすれば、君はまた一人でちゃんと歩けるようになるのだろうか」

杏子は黙って天井を見つめていた。公園の午前の中を跳ねまわっていた杏子の姿を彼は思い浮かべた。そしてあの軀を自分の無力な軀で汚してしまつて、重い無表情な塊りに変えてしまったことに哀しみを覚えた。『杏子』

たとえば我々が恋人という伴侶を得る時、あなたと一緒に暮らしたいとの懸念に応える時、頭の片隅では多かれ少なかれ、ためらいが生まれてはいないだろうか？

彼／彼女は大変魅力に満ちており、会話のやり取りも気さくに交わせ、隣に寄り添っている間は安らいだ気分ひたれる。だがそこで、ならば是非もなく、と即断できる人はどれだけいるだろうか？ 読者もまた彼／彼女を前にしながらも、こうした疑問をめぐらしたことはないだろうか？

これから彼／彼女と過ごすであろう時間は、本来ならば私が自由に振る舞える時間だったはずではないか？ 彼／彼女をひとまずの伴侶と決めたならば、私は他の人間と触れあう機会をどれだけ失っていくだろうか？ 彼／彼女とおだやかに暮らしていきたいのなら多少のエゴは抑えなければならぬのだから、私の性格は変わっていつてしまうのではないか？ 結局のところこうした疑問は、彼／彼女によって私の持ち分が奪われてしまうという懸念に尽きるのではないだろうか？ そもそも今浮かべた疑問は自分自身の損得ばかり勘定しているにすぎない。彼／彼女もまた、私と共に過ごしてしまえばあらゆる可能性を犠牲にしてしまうのではないか――

むろん、このような自問自答は子どもじみた愚図つきに過ぎない。それこそ朝方、まどろんでいる社会人が瞼の重さと闘いながら漏らす、本来ならばこれから過ごす時間は自由に振る舞える時間であつて会社が奪つていいものなどではない、との繰り言となんら変わ

りがないのである。

事実このようなためらいを打ち消し、人々は恋人を得ているし、職場に赴きもしている。ためらいにかかずらっていても損をするばかりだと弁えているからだ。そして恋人と連れ添う喜びによってためらっていた瞬間など忘れてしまう、あるいは目の前の仕事に精を出す間はためらっていた瞬間を思い出す暇などない。

とはいえ、ここで見逃してはならないのは、ためらっていた自分は確かに存在したにもかかわらず、我々はこのためらいを「子供じみた」と名付けて無きものとし、あたかも別人へと成り変わるように振る舞っている事実である。果たしてこのためらいは本当に無きものとすべきだったのだろうか？ といってもこの留保は、朝になればあの愚図つきはまたぶり返してくるのだから、人間は本来の願望を中々捨てきれないのだ、という意味ではない。

会社員が休日を得れば、惰眠をむさぼる時間をつかの間ながら過ごせるだろう。彼／彼女に愛想が尽きれば／を尽かされれば、喪失の悲しみは付きまとうものの、また自分の可能性を模索する日々に戻れるだろう。このように彼らは片方の可能性を選んだとしても、状況さえ許せばもう一方の可能性に身を置けるのだ。そこへ行くと本当はもう一方の可能性を捨てているのではなく、片方の可能性に身を置きながらも、もう一方の可能性への逃げ道は確保している。

それに反してためらいの中にある時、人は逃げ道を断たれている。一人である自由を捨てても恋人の方へと向かうのか。眠りという安息を蹴ってでも仕事へと向かうのか。そこで人は自分自身の存在を引き裂かれている。分裂を通してどちらかを選ぶ自分自身が浮かび上がってくる。そこで人は自身の素性を問うているのだと言っている。果たしてお前はどちららを選ぶのか、お前はどちららを選ぶような人間なのか、そもそもお前は何者なのか……分岐点に置かれた人々は自らの身を差し出し、残りの取り分できりくりしていくのだという実感を味わうだろう。たとえ後になれば逃げ道は設えられているとわかっているのに、自らの身がそぎ落とされてしまうかのような焦りに見舞われる——ためらいに足を取られている間は、そう錯覚する瞬間が訪れるのである。しかし、これは本当に錯覚なのだろうか。

ためらいを払った時、彼はためらっていた時点とは別の人にならざるを得ない。ためらっている時点では二つの可能性を残している人間だったのに、選んではしまえば一つの可能性しか残らない上に、それを可能性ではなく現実へと変えてしまうからである。そして自らのもとに残った現実が手から離れていった時、今度は切り捨てたはずのもう一方の可能性がふたたび手の中にやってきて現実となるだろう。では、ためらいの瞬間に存在したはずの自分は、もどってくるのだろうか？

そう、本当にそぎ落としたのは、ためらっている自分だったのだ。多様な可能性を失ってしまった、という意味ではない。そうではなく、多様にひろがる可能性のどこにも属さず、どんな価値基準にも量ることのできない自分が確かに存在したのに消えてしまったと

いうことなのである（お望みならば実存が本質によって押しつぶされてしまったといってもかまわない）。ためらいにあつて見逃してはならないものとはこれにほかならない。

しかし、こう暴いてみたところで当然の成り行きを説明したに過ぎないし、こうなるのも仕方がないのだと諦めるほかないだろう。どこにも属さないということは、自分を支えるものがないということだ。孤独さえ意味する。それに耐えきれぬ人間など存在するだろうか。かりに孤独に打ち勝てたとしても、否が応にもこちらの寸法を採ってくる他人がとりまくこの世界の中で、孤独でいられるだろうか。いかなる物どもにも引きずられることなく、ためらいに留まり自分を見まもりつづけられる者は、果たして存在するのだろうか。

第一章 二人が取り結ぶ関係は恋愛と呼べるだろうか？

山頂に黒雲のひろがり認めて谷へと下りてきた「彼」は、河原沿いの岩場にて一人で坐っている杏子と出会う。岩場の灰色の眺めがのしかかるように襲いかかってきたがためにうずくまったりでいたという手を取ってどうにか下山した三ヶ月後、駅のホームで電車を待っていた「彼」は、向こう側のホームから走り寄ってきた杏子と再会し、あの谷で何が起きていたのかと問いただしたところ、高所恐怖症に似た発作が訪れていたのだと答え、その発作を「彼」が救ってくれたのだとも明かした。

それから幾度か二人は待ち合わせるようになるものの、そのたびに杏子は矛盾した言葉を述べるばかりか、普段から二人で坐っていた席に他人が陣取っているのを見て入店を渋るといった変調さえ見せはじめる。混乱しきってしまった自分を助けてほしいとの声に動かされた「彼」は、三日に一度杏子と会い、一人で切符を買わせたり公園を一周させるといった日常の感覚を取りもどさせる《きたえなおし》を施すのだが、快方に向かうどころか変調に拍車がかかっていく。

再会した時に立ち寄った喫茶店の同じ席に坐れば神経は落ち着くが、レストランに入り「彼」の視線にさらされながら食事をすることはままならず、宿へとおもむき床で軀を交えても男の欲求が放つ熱は女のつめたい軀と融けあうことはない。男から向けられる憐れみの目を女は撥ねつけ、時にはしばらく二人で会わないと決め、久しぶりに会えば海へと向かい、似たようなやり取りを繰り返す。そのうちやがて「彼」は杏子の家を訪れる。

「彼」をむかえた杏子の姉は妹を病院へ連れていくと告げる。あなたからも説得してほしいとの声にうながされつつも、内心は抗しながら「彼」は杏子の部屋に入る。言葉をかわし、姉から差しだされたキーキをほおぼる姿を見つめあい、軀を交えた後、杏子は入院を決めたと告げ、窓の外にひろがる秋の夕暮れを見ながら、「ああ、美しい。今があたしの頂点みたい」と細く澄んだ声でつぶやく。

以上が『杏子』のあらすじである。原作に目を通した経験のない読者は、精神に異常をきたした女を男が庇護する恋愛小説と受け取るかもしれない。ならば二人は恋人同士な

のだ、とも。

その見当は間違っていない。二人は軀を交えているのだし、海やシヨッピングセンターには二人きりで出かけている。作中において数少ない第三者の姉は、電話をかけてくる「彼」の様子を察して、あるいは通話を終えたと足取りを軽くさせる杳子の姿を見まもって、「あなたもヨウコを好きなのでしょう」と問いかける。しかし、ここで「彼」は不意を突かれる。

「お願いだから妹を説得してちょうだい、健康にしてやってちょうだい。あの子はあなたが好きなんです。電話の後、階段を昇って行く足音が軽いよ。あなたもヨウコを好きなんでしょう？」

「ええ、それは、好きです」

彼は仏頂面でうなずいて、本人の前で一度も口にしたことのない言葉を、姉の前ではつきり言わされたことに気付いて啞然とした。(以下、特記しない限り引用はすべて『杳子』から行う)

もつとも、恋人にむかつて好きだと言葉にした覚えのない人はいるかもしれない。それどころか、わざわざ口にするのはヤボだったので滅多には言わない恋人達が大半だろう。好きだ、と自分の意志を言葉によって表明せずとも恋愛は成り立つ。

だが、「彼」は杳子と二人でいる間、おたがいの関係が世間一般で言われている「恋人」に当てはまるかどうか、いぶかっている節がある。たとえば、二人がはじめて軀を交えた後、ふたたび杳子を連れて暗い部屋へ足を向ける場面では、こう叙述されている。

はたから見れば、なるほど、軀のつながりが出来たばかりで、人中でもその恍惚の余韻に浸っている若い男女どうしのように見えるかもしれない。そう思いやって彼は慚然とした。ところが二人の姿をちらりと見やっつては通り過ぎて行く人間たちの皮肉な目つきを見ているうちに、同じ目つきの繰返しに暗示をかけられるのか、彼は段々に自分たちが彼らの目に映るとおりの者になってしまっても構わないような、そのつもりになれば今すぐにでもなれるような気がしてきて、彼の腕にひたすら重みをあずけている無表情な軀に情欲を感じはじめた。直接的な情欲ではなくて、相手の軀をすぐそばに置きながら、なかば想像の領分に踏みこんでいて、いつそう淫らな情欲だった。それに、杳子の軀を担いきれないという途方に暮れた気持ちが入り混る。彼の足は自然この前の部屋の方へ向いていく。

補助線を引けば、初めて軀を交えた際に「彼」は杳子の軀が何の表情も伝えて来ず、「熱を呑みこんで冷たくひろがる」ばかりなのを感じ、一人勝手な情欲を思い知らされている。それから断片をのぞけば、そうした情けない心情と世間の目とのギャップに苦しんでいる

ものと取れる。

しかし、苦しんでいるだけならばともかく、「彼」は世間の目を浴びせられたために情欲をもよおし、「部屋の中に二人して閉じこもり」、杏子の冷たい肌に触れるという「同じ事」を「繰返」すのだ。ここにはあたかも、こう情欲をもよおすべきなのだ、としたり顔で言う範例があつて、「彼」はそれに自分を当てはめながら杏子へと覆いかぶさっていくような経緯がある。初めて交わった時には世間の目など経ることなく、杏子を寝床へと誘いこんでいるにもかかわらず。

こうした兆しは他にもある。二人はしばらく会わないでいようと決めた後、再会するとすぐに海へと向かう。そのため長距離電車に乗るのだが、車内で坐っている間、「彼」は隣に席を取る勤め人風の中年男の、杏子を眺めまわす目に気付く。

そのうちに、隣の男がときどき週刊誌から目を上げて、杏子のうつむけた額から小さくつぼめた胸にそつて腰のあたりを眺めまわしているのに、彼は気がついた。杏子の姿のしおらしさを賞玩して、あの娘は処女だろうか、などと思ひやつている目つきだった。男はやがて軽く掻き立てられた情欲のなごりを運んで、電車を降りて自分の暮しにもどつていくだろう。そのなごりが無意識のうちに周囲の人間たちにたいする、たとえば家族に対する優しさとなつて現れるかもしれない。寢床に入つて明かりを消すとき、杏子の姿がふつと浮かぶかもしれない……。杏子のために神経を張りつめるつらさから、彼はふと隣の男の無責任な立場がうらやましくなつて、男と並んで、男と同じ目つきで杏子の姿を眺めまわした。すると、二人して杏子を汚しているようなおぞましい気持ちになつて、彼は思はず杏子から目をそむけた。そして軀のつながりまであるのにここでこうして離れ離れに坐っている自分たち二人に対する罰のように、今度は自分が次の駅で黙つて立ちあがつて降りてしまうさまを想像した。自分がいなくなつたあと、杏子はこのままどこまで行つてしまうだろう、とホームに立つて、遠ざかる電車を見送る気持ちを、彼は思ひやつてみた。見捨てられた淋しさは彼のほうに残つた。彼は杏子を見まもることに疲れて目をつぶつた。

何の前置きもなく読めば、別れ際にまで踏みいつてしまった男の心境と読めなくもない。事実二人は海へと向かう長距離電車に乗るまで、しばらく会わないでいる日々を挟んでいたのであり、そうなつたのも（明言はされていないが）快方へと向かわない杏子に引きずられる危うさにたじろいだからである。さらにここには、自らの情欲が杏子に届かないままなのでは、との諦めにかたむいた懸念がうかがえる。

それにしても、「彼」が隣の中年男の視線を借りて杏子を「眺めまわし」ている点には注意を要する。「彼」は単純に他人の立場へと身を置くことで自らの身の程を知っているだけではない。「彼」は中年男の目を借りて自らの情欲の輪郭を知るばかりか、情欲一般をみつめていようなのだ。そうでなければ何故、中年男の家庭での振る舞いにまで想像をめぐ

らせるのだろうか。余所で得た情欲が家庭の緩衝材になっているかもしれないなどと推定するのだろうか。

ここで一つの判断がくだせる。この二人の間で進行している関係は、世間から見れば恋人同士のものといえるし、彼らもそうした目つきが望むとおりの道をたどる。が、一方で彼らは世間の営みに自分たちをあてはめようにも居心地の悪さを感じざるを得ないし、そこから転じて自分たちを広い理解の範疇におさめようとするものに対して問いかけを投げている。

そもそも彼らはなぜ互いに惹かれあつたのだろうか、なぜ杏子は自らの変調が激しくなつていくにもかかわらず「彼」と共にいるのだろうか、なぜ「彼」は自分に添っていることでますます変調をきたしていく杏子をそれでもなお支えようとしているのだろうか？

杏子にとっては、谷にひろがる眺めに苦しんでうずくまっていた自分を、彼が救つてくれたのだという実感があつたからこそ、「彼」をもとめている。

「何度も言つたように、僕は君を麓まで降ろしただけだよ。僕が通りかからなくても、もうしばらくすれば、君は一人で降りてきたさ」

「それはだめだったわ。たとえ一人で降りてこれても、もうだめだったわ」

「無事に降りてくれば、それでいいじゃないか」

「あなたのおかげで、元氣になりました」

「僕は君の病氣とやらをなおした覚えはないよ」

「でも、なおつたんです。あれから、何もかも、とても静かにみえるようになりました。目にしつくりなじんで、とてもきれい。きれいすぎて、もつたないみたい」

こう告白してみせながらもやはり変調へと傾いていく杏子を相手に、「彼」は、本当に自分ならばこの女を救えるのかもしれない、と信じて、心を動かされたのである。

「すこし鍛えなおしてやろうか」

「ええ、きたえなおしてちょうだい。お願いよ。このままじゃ困るわ」

また別な店を指定してやろうかと彼は思ひかけたが、また同じことの、また判で押ししたような反復を予感して、陰惨な気持ちになった。

「内側と外側つてのは、気味が悪くていけないなあ」

「吊橋の時みたいに助けてほしいの」

「補足すると、この「吊橋の時」とは下山した際の出来事を指している。谷の岩場で坐り込んでいた杏子を助け起こした後、二人は河原を下り山肌に沿った細道をたどった末に吊橋へといたる。が、杏子は橋のたもとでかがみこんでしまう。「彼」は一度渡ってから橋の真中へともどり、《渡っておいで》と目で合図して杏子の足取りを見まもる。橋を渡りだし

その言葉に、彼はたわいもなく心を動かされた。

しかし、二人の予感とは裏腹に、杏子の調子は悪くなっていく。杏子は自らを忌まわしいものをみるかのような目つきで見つめてくる。「彼」にあらがうし、「彼」は自分が変調をそのかしているのではないかと考える。彼らの見込みは間違っていたのだろうか。

もつとも、だからといって離れていくというわけではない。それどころか、「彼」はしばらく二人で会わないと決めた後、山奥の安宿にこもる時間を通して、もはや杏子は健康に戻らなくてもいいとさえ思うのだ。もちろん、杏子をもとめる心は保たれたままで。

夜が更けて、厚い蒲団にくるまって谷の暗闇に耳を傾けていると彼の軀は疲れの中で静まったまま、杏子のことを思った。さまざまな杏子の姿が思い浮かんだ。しかしどれもすぐに沢音の中に紛れてゆき、最後にはひとつ、膝でタオルをゆるやかに盛り上げて夏の午後の物憂さの底に横たわり、軀の重さに感じ耽っている杏子の姿が残った。杏子の軀は病気を内につつんで、そのまま成熟して落着くことを願っている。彼の心が先へ先へ進もうと苛立ちさえしなければ、杏子の体は癩の強い少女みたいに痩せ細ることも、淫らな女みたいに肥満した感じを帯びることもない。杏子の病気を治してやろうという思いがかりは、彼の中からとうにきれいに消えていた。病気が快方に向かうことも、悪化することも、彼は望まなかった。良くなること、悪くなることそれはどちらも杏子を破壊することのように思えた。杏子は自分の軀の重さを嘆く必要はない。彼は、すくなくとも彼の軀は、いまのままの杏子と、同じような繰返しにいくらでも耐えられる、それに飲びさえ感じるができる……。

驚くべきことは何も無い。月日が経つにつれて事の始まりは忘れてしまうものの、なお恋人との関係は好ましく保たれている、という姿はありふれている。そもそも理由が一つしかなくとも関係がつづく、というならば苦労はない。関係をつづける内に、関係をつづけるための要因がいくつも重なってゆき、もはやきっかけなどはさして重要でなく、いっそ消えたとしても不足はない、と進んでもおかしくはないのだ。

いっそあえて言いきろう。杏子の変調だけが原因で彼らが添い続けられているのならば、別に杏子である必要はなかったのである。この女は支えきれないと「彼」が思ったのなら、ばそこで関係は打ち切られてもよかったのである。そして、自分にとって御しやすい、す

たぎごちない足取りは間もなく立ち止り、前方から目を離して踏み板の隙間から急流をのぞきこみはじめる。その目付きが「うつとりと流れに見入っているように見えた彼は、「下を見るんじゃない」と大声で叫び、意識をふたたび自分の許へと戻すと、杏子を見つめつつそろそろと後退していく。歩きなおした足が踏み板をあと二枚あますところにいると、「彼」は岸に飛び移って両腕を差し伸べ、倒れ込んだ杏子にのしかかられながらもようやく橋を渡り終える。

こし病んだところのある女に乗り換えても良かったのである。そうすれば「彼」の「思い上がり」は充たされつづけていただろう。なのに、なぜ「彼」は杳子から離れなかったのか。それはすなわち、「病気を治してやろうとの思い上がり」を差し引いても杳子なしではいられないと、「彼」が気付いたからに他ならない。

自己中心的な思考から抜け出した「彼」は、自分が杳子に惹かれる理由をこれ以後見出しはしない。もつぱら杳子の挙動をみつめるばかりで、自分は彼女のここに惹かれていて、などとは確認しないのだ。先の杳子を思い浮かべる様子からも、特別病気に重きを置いているわけではないことがうかがえる。病気をもとめているのならば、なぜ「彼」は悪化を望まないのだろう。いまや「彼」は自分の恋愛感情の動機をたしかにさせてくれる、杳子の中の何かをもとめているのではなく、あくまでも杳子自身をもとめるようになっていく。病気だとか容姿だとか、彼女にふくまれた要素をひっくりめられるただ一つの器、この世に一人しかいない杳子という人間を。

しかし、その断言によって論考を終えてしまうのは怠惰である。この二人をむすびつけるのは、他人にもわかりやすい原因でもなく、もしくは彼らにあらかじめ備わっていたものでもなく、そうではなくむしろ、彼らが付き添う中で繰返してきた営みそのものであることは確かだ。だがそれはこの小説を読んだ者であれば誰でも汲みとれる簡単な事実を説明したに過ぎない。「彼」が杳子をもとめるのは、杳子が杳子だからだ、という同語反復を導きただけなのだ。第一、そんな公式だけで事足りるのならば批評など必要ない。

世間にも目を向ければ、すべての恋人たちは他の誰でもない、ただ一人だけの相手をもとめたからこそ、今もなお二人で暮らしているのだろう。「彼」と杳子もそれと変わりない。しかし、固有の事実だったはずの営みを、我々がこうして大上段から眺めながら共通の事実として束ねてしまった時、そこから本来の固有性は薄れ、一般的あるいはありふれた事実と化してしまうのである。同時に批評は自分の判断だけを述べる感想へと成り下がる。対象を見つめる作業を怠ったがゆえに。

批評が為すべきなのは、対象にそなわっている固有性を据え置いたまま、その固有性がどのようにして形づくられているかを描き出すことである。もつといえ、この作品を語るにはこれしかない、という語り口を（作品を書きなおすがごとく）あらためて見つけ出すことである。そのためには「彼」（杳子）が杳子（「彼」）をもとめるための動力源を探りださなければならない。もちろん、病気になるいは病気への同情心や庇護欲といった一般にも通用する言葉で説明してはならない。

では、どうすればいいか。まずは彼らの出会いへとさかのぼろう。二人が他でもない「彼」／杳子に出会った瞬間へと、「彼」／杳子を意識せずにはいられなくなったきっかけとなった瞬間へと。

山頂に黒雲のひろがり認めた「彼」は谷に着くと杳子に出会う。それまで「彼」は五時間ちかく人の姿を見ていない。そこに軀の疲れが加わって、「周りの岩がさまざまなる人の

姿を封じこめているように見えてくる」。そうであるからには谷に下りたところですぐに女の姿を見出したわけではなく、《ああ、あんなところに女がいるな》と頭の隅でつぶやいて歩き続け、次の瞬間にはもう沢の響きに気を奪われていた。そこでこの沢では遭難がたびたび起こり、その中の生還者が肉親にさえ見分けがつかないくらい顔つきが変わっていたという伝聞を思い起こす。

そのうち「彼」はようやく杳子を捉える。しかし、彼の目はまともな認識を行わない。

それは人の顔でないように飛びこんできて、それでいて人の顔だけがもつ気味の悪さで、彼を立ちすくませた。ところが、顔から来る印象はそれではったり跡絶（とだ）えてしまつて、彼はその顔を目の前にしながら、いままで人の顔を前にして味わつたこともない印象の空白に苦しめられ、徐々に狼狽に捉えられていった。

「狼狽」の手から逃れるように「彼」は言葉を重ねていく。人の顔にそなわっているはずの体臭にも似た表情さえ洗い流した女の顔だと。手前につまれたケルンを見つめながらもまなざしに力はなく、かえつてケルンの一途な存在に表情を吸い取られているかのような女の顔だと。未知の女の顔でありながら、まるで遠くへ消えていくかすかな表情を記憶の中からたえずつかみなおそうとする緊張を「彼」に強いてくる女の顔だと。そこにいるのが人間であるとの証しを、自分が立てなくてはならないとでもいうような気持ちに迫りこむ女の顔だと。

やがて《泣き疲れて、庭の隅にかがみこんで石ころを見つめている子供の顔だな》という落とし所を見つけると、「彼」は女の軀には少女のような雰囲気があると気付いて、すこしの間その「表情」の輪郭をたどる。軀の叙述が終わると、こんな一文がつづく。

そこにいたわるべき病人のいることによく気がついて、若い登山者らしい態度を取り戻し、女の方にむかつて足を踏み出した。

この時点ではまだ「彼」は義務感によって動いただけであり、女に対して特別な印象を抱いたわけではない、などといえるだろうか？ 他人である我々にも理解出来るような理由は生まれていない、などと。

もはや蒙昧は許されない。我々は『杳子』のテキストと対面している。テキストと向き合えば必ずもたらされる動揺から目をそむけ、安らぎにいたりつくために余所から借りてきた言葉で一般的な解釈の枠組みへと抑えこむような真似をしてはならないのだ。我々はひたすらに『杳子』を見つめるほかない。テキストがふりまく挙動をつぶさに見まもつてこそテキストは解説できるのだ。

「彼」が杳子に引き寄せられた地点はどこか。泣き疲れて庭の隅にかがむ子供のような姿を見て庇護欲が生まれたところか。違う。目の前でうづくまる女の顔を見て、彼女が人

間であるとの証しを立てられるのは自分しかいないと使命感を持ったところか。違う。そんな説明は他人とも分かち合える語彙から引っ張り出してきた借り物にすぎず、杳子にくわした時の感情をそのままに映した言葉ではない。

本当に目を向けるべきはその前の引用だ。

それは人の顔でないように飛びこんできて、それでいて人の顔だけがもつ気味の悪ささで、彼を立ちすくませた。

この一見矛盾した言葉にこそ、杳子それ自体に向かった時の印象が克明に描かれている。そもそもここで二度記される「人の顔」は、それぞれ意味を異にしている。どういうことか。

まず、一つ目の「人の顔」について。たとえば我々は初対面の他人と向かいあった瞬間、第一印象から相手がどんな性格を持つのか推定する。それがたとえ当てにならないからうと、なぜ推定できるのか。我々がこれまで多く接してきた人間の特徴たちを、相手と照らし合わせているのである。

「彼」もまた杳子を初めて見た際、こうした認識過程を踏んだはずだ。しかしながら、「彼」は性格の照合に失敗している。「人の顔でないように飛びこんでき」たとは、こうした認識の頓挫を指しているのだ。引用した一文の後、「彼」は「いままで人の顔を前にして味わったこともない印象の空白に苦しめられ」と続くが、これほど明らかな証拠もない。

こうしてみれば二つ目の「人の顔」が何を指すかは明らかだろう。経験とも一般例とも照らし合わせることでできない、他ならぬ杳子だけが持つ顔である。それを前にして「彼」は、「いままで人の顔を前にして味わったこともない」特別な印象を抱くこととなる。この印象が本当は「空白」だったのではなく、いままでの経験のどこにも落ち着きやしないという感情を言いかえたにすぎない、と暴きたてるのはヤボだろう。

とはいえ、これが恋愛感情とは言えるはずもない。理由などなしに「彼」は杳子にヒトメボレしたのだ、と言おうものなら笑いすら起きないだろう。事実も後押ししてくれる。

彼らは谷での一件以来三カ月会わなかった。下山したのち終着駅のホームへと送るまで「彼は杳子の身の上をたずねもしなかった。「ほとんど口もきかなかった」。名前さえ告げ合わなかった。「知りあったばかりの若い男女のように喋りあうには、出会いがすこしばかり異

念のために注意しておくが、引用した文章の後、「人の顔ならば、いつでも、誰にも見られていない時でも、たえず無意識のうちに発散させている体臭にも似た表情があるものだ。そんな表情まできれいに洗い流されたように、その顔は谷底の明るさの中にしらじらと浮かんでいた」と続く。これをもって杳子からは固有性さえも抜け落ちているのだとするのは誤りである。「人の顔ならば」と語り出した時点で「彼」がふたたび自らの経験則に杳子を組み込もうとしているのは明白だ。

常すぎた」と断ってはいるが、とにかく恋愛感情を抱いたのならばここにあるような成り行きにはなっていないはずだ。

そもそも恋愛感情などと口走ってしまったら、今度は他ならぬ「彼」の感情を一般例に当てはめてしまうではないか。

ともかく、他ならぬ杏子だけが持っている顔に立ち向かったその時、他ならぬ「彼」しか抱けない感情も呼び起こされていたのは間違いないのだ。

しかし、この時点の「彼」は杏子を見つめる中で生まれた狼狽から逃れる。あらゆる言葉と並べては自らの手の中に杏子を収めようところみる内に、《泣き疲れて、庭の隅にかがみこんで石ころを見つめている子供の顔》という解釈に落ち着く。杏子を助け起こして下山の道をたどる間も、足取りのおぼつかない女に手を焼くとはいえ、言葉は失わずその身振り手振りを丹念に追っていく。

そんな中、ふだんの生活に戻ってから山での体験をふりかえる叙述には、注目すべきところがある。

杏子については、彼の右腕になじんだほのかな温みしか残らなかった。ちようど雨の中で気紛れに猫を抱き上げて、それから置いてきたような感じだった。珍しい体験として意識することさえほとんどなかった。

あの頃の彼自身も、かならずしも尋常な状態にあったとは言えない。夏休みから盲学校にも出ないで、ほとんどひきこもりきりだった。酷い時には、十日もつづけて食事時以外は自分の《子供部屋》に閉じこもって、退屈を知らなかった。言ってみれば、これも自己没頭という病いである。しかしこの健康な病いも昂じてくると、外のことにはたいする甚だしい冷淡さをもたらした。そればかりか、皮肉なことに、どうかすると現在の自分自身にたいする、自分自身の体験に対する、奇妙な無頓着にもつながって行きかねなかった。

まれに、彼はあの谷底の出来事を思い出した。そして明日にでも学校に出かけて行って、友達にその話をしてみたいという気になった。友達はその話を面白がるに違いない。そうすれば迂遠な道ではあるが、あの出来事は彼自身にとってようやくひとつの体験となるに違いない。そしてこれからもひきつづき幾つかの事を体験していくだろう自身自身に、また興味をもてるようになるかもしれない。

ところがあの出来事を細かに思い出そうとすると、彼はかならず不快なものにつきあたる。あの女の目に時々宿った、何か彼を憐れむような、彼の善意に困惑するような表情だった。《あの女は、あそこで、自殺するつもりだったのではないか》という疑いが浮びかけた。すると記憶が全体として裏返しになり、彼は女の澄んだ目で、幼い山男のガサツな、自信満々な振る舞いを静かに見まもる気持になった。あの女は若くても彼と同じ年、むしろ彼よりも三つ四つ年上の女として、最後には彼の記憶の中に落着いた。

重要なのは、四段落目の「彼」が「女の澄んだ目」を導入しながら自分の体験を見つめなおしている箇所である。自分しか有していないはずの体験を、どこにでも見受けられる「幼い山男のガサツ」な振る舞いにあてはめていることはこの際どうでもいい。なぜそうした見直しを女の視線を介しつつ行っているのか？ のみならず、なぜ女の視線を借りられたのか？

「自己没頭という病い」をもとに語るにはあまりに心許ない。自己に没頭するとかえって自身の体験に冷淡になるというアイロニーは興味を起させる。が、この文脈においては、誰かの視線を介さなければ自分の体験もまともに振り返ることはできない、という意味しか表していない。つまり、「自己没頭という病い」はお膳立てを整えたに過ぎず、女の視線を呼びこむ原因となったのは他の何かだということだ。

くわえて、第一段落においては「彼の右腕になじんだほのかな温みしか残らなかった」にもかかわらず、第四段落にいたると「あの女の目に時々宿った、何か彼を憐れむような、彼の善意に困惑するような表情」が焼きつき、「最後には」「あの女は若くても彼と同じ年、むしろ彼よりも三つ四つ年上の女として」「彼の記憶の中に落着」く。不思議ではない。正確かどうかは別だが、回想をとおして当初は念頭になかったものが見逃せぬものとして現れることはある。しかし、やはりそれが「女の視線」において為されている事実は忘れてはならない。ここには一人ではなく、二人で出会いの場面を再構成するような手つきがある。たとえば刑事が目撃者を聴取することで、もしくは目撃者が刑事の助けを得ながら事件の真相をつまびらかにしていくような……ひとまずこれは後にゆずる。

女の視線に話を戻そう。こうした様子は後にも描かれている。たとえば中盤にて、「杏子の醜怪な病いの目撃者になった自分自身の存在を重荷と感じ」るようになった「彼」は、馴れ初めを確認するように谷で起こった事を振り返る。

……あの谷底で、杏子は病気の最悪の状態の中にうずくまりこんでいた。ちょうど野獣が狭いところにまるまって、病いが自然に通り過ぎていくのを待っているみたいに。そこへ彼がやってきて、黙って通り過ぎればよかったのに、立ち止まって彼女をみつめた。二人はみつめあった。ことによると、あの時、杏子の中で、自然に流れ過ぎるはずだった病気が、他人の目に見つめられて小さな石みたいに凝固してしまったのかもしれない。彼は杏子の病気を見つめて、視線でたぐり寄せ、たぐり寄せて、彼女を麓まで連れてきた。おまけに吊橋のたもとでもう一度うずくまりこんだ杏子を立ちあがらせて、彼の目をみつめさせて吊橋を渡らせた。それだから、いま、彼を前にすると、彼のまなざしを感じると、彼女の中で病気の核がふくらみだすのだ。しかし二度目に、階段を駆け降りてきたのは、杏子の方じゃないか……。

（こちらの場合、「彼」は杏子に半ば罪悪感を背負ったがゆえに杏子に感情を移入させた上で、自らの行いを見直している。つまり今度は杏子の軀を借りている。そして「彼」に杏

子の軀を借りるようにながしたのが罪悪感めいたものである、という点を見落としてはいけない。

そもそも罪悪感とはどういうものなのかという考察はさておき、ここで「彼」は杏子に對して余計なことをしてしまつたのではないか、あの時の自分は無思慮な振る舞いをしていたので見落としをしていたのではないか、という意識に基づいて相手の軀を借りながら回想を行っている。すなわち、自分勝手な印象（自分は杏子を救つたのだという思い上がり）を疑問に付すために杏子の軀を借りているのだ。

この観点から「女の澄んだ目」を借りられた要因も明らかになる。もう一度、大事な部分だけをつぶさに見ていこう。

ところがあの出来事を細かに思い出そうとすると、彼はかならず不快なものにつきあたる。あの女の目に時々宿つた、何か彼を憐れむような、彼の善意に困惑するような表情だつた。《あの女は、あそこで、自殺するつもりだつたのではないか》という疑いが浮びかけた。すると記憶が全体として裏返しになり、彼は女の澄んだ目で、幼い山男のガサツな、自信満々な振る舞いを静かに見まもる気持になつた。あの女は若くても彼と同じ年、むしろ彼よりも三つ四つ年上の女として、最後には彼の記憶の中に落着いた。

いっそ「あの女は若くても」以降は切り捨ててもいい。思い出そう。彼は狼狽から逃れるために言葉を重ねた。それが杏子を一般例へと送り返す手つきだつたことも明らかになつた。切り捨てた文章もまたその反復なのだと思つていい。すると、「彼」がつきあたつた「不快なもの」とは、あの「印象の空白」と同工異曲だと知れる。

つづいて書き継がれる「女の目」によつて生まれた記憶の映像も、「彼」が思い返しはじめた段階では（「自信満々な振る舞い」といつた言葉には還元できない）まとまらない印象でありつづけたはずである。してみれば、「女の目」は「彼」の記憶を不安定なものどさせるものとして働いていると知れる。ではなぜ、「不快な」思いをしてまで彼は「女の目」を借りようとするのだろうか？

きつぱりと言ひ切ろう。出会いの体験をまとまつた印象にとどめたくないという思いが、杏子の視線を借りさせるのである。あるいはこう言い変えてもいい。「印象の空白」を踏みにじつた罪責が杏子の視線を借りさせるのである、と。いや、もっと直截言えるはずだ。谷において他ならぬ杏子を見つけたと同時に、他ならぬ「彼」にしか抱けない感情も呼び起こされていた。すなわちこの他ならぬ感情にあらためてとらわれたという思いが、「彼」に杏子の視線を借りるよう促すのである。⁸⁰

⁸⁰ 彼が意識しているかどうかは問題ではない。意識とは言葉によつて成り立っている。言葉（意識）以前の段階にも「彼」を突き動かすものがあるとわかつたからには、言葉を一部とした上での「彼」の存在全体に目を向けなくてはならないのだ。それでもなお疑念が残るといふのならば、杏子の視線は彼の中で他ならぬ感情を呼び覚ますために働いている、

この断言は、杏子の視線なしでは「彼」の他ならぬ感情はありえない、とも転回させる。さらには杏子なしではあの山での体験は確かにならない、そもそもあの山に自分は存在したのかさえ定かにならない。そんなよるめきを杏子の目は支えてくれるのである。

「印象の空白」につづく、杏子の顔を描写する文章にこうしたものがある。

(……) 未知の女の顔でありながら、まるで遠くへ消えていくかすかな表情を記憶の中からたえず掴みなおそうとするような緊張を、行きずりの彼に強いた。彼の緊張が少しでもゆるむと、その顔は無表情どころか物体のおぞましさを頭わかせる。そのたびに彼はそこにいるのが人間であることの証しを、自分が立てなくてはならないとでもいうような気持ちに追い込まれて、逃げ腰ながら、目だけは一心に女の横顔を見つめ、そして知らず知らずのうちに自分自身の記憶を幼い頃の方へ向かって探っていた。

こうは言うものの、「自己没頭という病い」にかかっていたことを思い返せば、「彼」の存在感覚とて危うくなっていたとも言えるのだから、「人間であることの証しを」立てるのは彼のみならず、杏子でもあったと言えるのだ。しかし、そんなことがたやすく受け入れられるだろうか？ 自分を証し立てるのが他人であるなど。そもそもこの仮定自体、「彼」にとって能動的であるはずの「他ならぬ感情」を、杏子によって生み落とされる受動的なものとするかえることよって成り立っている。そんな錯誤からもたらされる狼狽は、「彼」に嫌悪をもたらすだろう。だからこそ、「他ならぬ感情」に身をゆだねることなく、言葉を重ねてそこから逃れようとするのである。ましてや恋愛感情などというものには置き換わるはずもない。だが杏子を見捨てられない気持ちは動く。それゆえに杏子の病気を救うという思い上がりの力を必要とした。

さりとて、「彼」がどう反発しようが、杏子の視線は繰り入れられる。「彼」の内なる感情が杏子の視線を繰りいれつつける。いかに言葉を弄してかりそめの土台を作ろうと、杏子は立ちほだかる。「彼」自身が杏子を目の前に置かざるを得ない。彼女は暗黙裡の問いかけをやめない。「彼」の他ならぬ感情が、そうしてくれるよう促すのである。あなたはどのようにしてあたしを救ったのか、あなたはあたしをどう想っているのか、あたしをもとめるあなたは何者なのか……。

谷において「彼」が杏子のもとへと近づいていく際の、象徴的な文章を引用しよう。

その時、彼はふと、鈍くひろがる女の視野の中を影のように移っていく自分自身の姿を思い浮かべた。というよりも、その姿をまざまざと見たような気がした。歩むにつれて、形さまざまな岩層の灰色の広がりの中に、その姿は女のまなざしに捉えられずに段々

と無意識がもたらした結果であるかのごとく言い換えてもいい。どのみち結果を受け取るのは彼しかいないのだから、大した違いはないのだが。

に傾いて溺れていく。漠とした悲しみから、彼も女を見つめかえた。すると女の姿も彼のまなざしにつなぎとめられずに表情をまた失い、はつきりと目に見えていながら、いまわりの岩ほどに訴えてこない。彼はすでに女の姿を背後に打ち捨てて歩み去るころになった。

それから、まわりの岩という岩がいまにも本性を顕わして河原いっぱい雪崩れてきそうな、そんな空恐ろしい予感に襲われて、彼は立ち止まった。足音が跡絶えたところに、ふいに夢からさめたように、彼は岩のひろがりの中にほっそりと立っている自分を見出し、そうしてまっすぐに立っていることにつらさを覚えた。それと同時に、かれは女のまなざしを鮮やかに軀に感じ取った。見ると、荒々しい岩層の流れの中に浮ぶ平たい岩の上で、女はまだ胸をきつく抱えこんで、不思議に柔軟な生き物のように腰をきゅうとひねって彼の方を向き、首をかしげて彼の目を一心に見つめていた。その目を彼は見つめかえた。まなざしとまなざしがひとつにつながった。その力に惹かれて、彼は女に向かってまっすぐに歩き出した。

これが山を降りた後で再会してからの関係をも規定しているのならば、「彼」の言動は香子によって縛られていることとなる。いよいよ、香子を見つめなければいけない。長きにわたって我々は「彼」の仕草ばかり追ってきた。『香子』の叙述は「彼」を中心とした三人称一元にもとづき為されるのだから自然な成り行きだったのかもしれない。しかし、実際に視点が香子へと移り変わる箇所もあるのだ。たとえば、谷へと下りてきた「彼」をみつめる香子の目付きを記した、この文章のように。

……そのとたんに、香子は男の姿をはじめて視野の中心に捉えた。男は二、三步彼女に向かってまっすぐに近づきかけて、彼女の視線を受けてたじろぎ、段々に左のほうへ逸れて言った。男は香子から遠ざかるでもなく、香子に近づくでもなく、大小様々な岩のひしめく河原におかしな弧を描いて、時々眼の隅でちらりちらりと彼女を見やりながら歩いていく。細長い軀の、背を獣みたいにもっさりまるめて、まるで薄い氷の上をそろそろとわたるみたいに、おさない目もとに不安をむき出しにしている。ところが男が歩いていくにつれて、灰色のひろがり、男を中心にして、なんとなく人間くさい風景へ集まって行く。そのさまを香子はいかにも珍しいものを目にする気持で見まもった。あの人はどんなにわが身をおしく思っていることだろう、と彼女は驚嘆した。わが身をおしく思っ、そのために不安に苦しめられて、その不安をまた愛おしく思っ、岩層のひしめきにたちまち押し流されてしまいうちなればけの存在のくせして、戦々競々と彼女をよけていく。

もっとも、本当に視点が切り替わっているかは怪しい。この引用の前には、こうした一文が置かれているのだから。

後になって、お互いに途方に暮れると、二人はしばしばこの時のことを思い返しあつた。二人はそのつどそのつど、この奇妙な出会いをきれぎれな言葉で満たしあつた。谷を下りてくる彼の山靴の音を、杏子も早くから耳にしていたという。(……)

伝聞から視点を移すからには、杏子だけが有している視点とは言えず、「彼」もこれ以降の光景を杏子と共に思い浮かべているのだ。そのため、杏子へと視点を移すというよりも、「彼」の視点の中に杏子の視点を組みこむ、入れ子構造を形づくっているのだとしたほうが正しい。

しかし、これは杏子が本当に捉えた光景ではないのだから参考にならない、と切り捨てるのは早計である。注目すべきなのは出会いの場面を「二人」で話し合いながら思い返しあっている点だ。そう、杏子もまた「彼」の視線を繰りいれながら谷での出来事を思い返している可能性がある。のみならず、こんな憶測もまた立ち上ってくる。杏子もまた他ならぬ感情に捉われている可能性があるのではないかと。

《病氣》のことに触れると、杏子の言葉はことに曖昧になる。山の中で彼に出会ったおかげで元気になった、と彼女はくりかえし言った。そのくせ、《病氣》がいちばんひどかったのは、山から帰ってきてひと月ほどの間だったと言う。彼がその矛盾をつくくと、《あなたにホームで出会ってから元気になった》と言いなおしたり、《山からもどって来てから、いつも、あなたの顔を思い出していた》とか答えにもならないことを言ったりしたあげく、また、彼のおかげで自分がどんなに元気になったかを潤んだ目で語り出す。彼はそれに反論する。

「何度も言ったように、僕は君を麓まで降ろしただけだよ。僕が通りかからなくても、もうしばらくすれば、君は一人で降りてきたさ」

「それはだめだったわ。たとえ一人で降りてこれても、もうだめだったわ」

「無事に降りてくれば、それでいいじゃないか」

「あなたのおかげで元気になりました」

「僕は君の病氣とやらをなおした覚えはないよ」

「でも、なおったんです。あれから、何もかも、とても静かに見えるようになりました。目にしっくりなじんで、とてもきれい。きれいすぎて、もったいないみたい」

矛盾は問題ではない。彼女が何を伝えようとしているか、彼女がどう感じているかのために矛盾してしまうのかを解き明かす方が大事なのだ。

一つだけ、会話の往復にズレが生まれている。『無事に降りてくれば、それでいいじゃないか』／『あなたのおかげで元気になりました』。ズレを起こしてまでも伝えたいことがある。それだけでない。矛盾をきたしてまでもこの人にあるあなたは自分にとって重要な存

在であることを伝えたい。あの谷でなにが起こったのかは分からないが、とにかくこの人に助けてもらったという手触りは残っている、こうしてこの人と向かい合っていると、その手触りがありありと感じられる……。

これでは仮説にとどまる。それならばさかのぼろう。小説を一から眺め直したことで「彼の存在の有様をかたどったように、杏子の存在を一から見直すことで、その有様をつかめる可能性もあるのだと信じて。

杏子は「彼」より先に頂上を降りはじめ、「彼」と同じ道をたどった末に谷へと着いた。河原に立った時、杏子は「谷底にのしかかる圧力を軀にじかに感じ取った」という。疲れはそれほどでもなかったが、平たい岩のところまでやってくると、リュックサクから水筒を出そうと思つて岩の上に腰を下ろした。

その途端、杏子は周りの重さが自分のほうに集まり、周囲の岩が自分を中心にしてふいに静まりかえつたのを感じて、思わずうずくまりこんでしまう。山の重みが支えられる地点に、何も知らず腰を下ろしてしまつたのだと感じた杏子は恐ろしさを覚える。そんな畏れに顫（ふる）える子供みたいな心を残していることにさえ空恐ろしさを覚える。

畏れのあまり身動きひとつ取れなかつた杏子が、ようやく顔を上げて見回したところ、周囲の様子も変わっている。あたりの景色が流れ落ちるように胸の内側へじかに迫ってきて、全身を固く締めさせる。杏子は視界を狭めて岩のひとつひとつを丹念に見つめることで、部分から全体を組みたてるように風景を確かなものへとまとめようとした。が、流れ落ちる感覚はなくなつたものの、「ひとつひとつの岩が垂直の方向ばかりに強くて、どぎつくて、水平の方向がとても弱くて、頼りなく」映るようになり、そんな風にひしめきあつている岩場がどうしてこの軀を支えてくれるのかわからなくなる。途方に暮れた杏子は岩に坐つたまま、物を思うものの自分の中心さえつかめなくなる。灰色のひしめきの中へ思いは流れていき、あちこちから物憂げなつぶやきが聞こえてきては岩に沈んで、静まつたかと思えば「子供みたいなしりのない声でつぶやき出す」。

いつのまにか杏子は目の前に積まれた小さな岩の塔をしげしげと眺めていた。それが道しるべだということは、その時、彼女はすこしも意識しなかつたという。どれも握り拳を二つ合わせたぐらいの小さな丸い岩が、数えてみるとぜんぶで八つ、投げやりに積み重ねられて、今にも傾いて倒れそうに立っている。その直立の無意味さに彼女は長いこと眺め耽つていた。ところが眺めているうちに、その岩の塔が偶然のつり合いによつてではなく、一つ一つの岩が空に向かって伸びあがろうとする力によって、内側から支えられているように見えてきた。一つ一つの岩が段々になまなましい姿になり出した。それにつれて、それを見つめる彼女自身の軀のありかが岩の塔をかなめにして末広がりになってしまい、末の方からたえず河原の流れの中へ失われていく。心細くて、杏子は自分の軀をきつく抱え込んだ。軀の感じはまだ残っていた。遠い遠い感じで、丘の上から自分の家を見おろしているみたいだった。

「そんな感じ……。それとも少し違うみたい」と杏子は言い、今度はほとんど正反對なことを喋り出して、彼に首をひねらせた。

しっかりと振り返れないのは病気のせいだと断じてはならない。「彼」が自分の存在を他人によって証し立てることに臆したように、杏子もまた自分の存在が岩場に呑みこまれた過去をすんなりと受け入れられていない可能性もあるのだ。ともあれ、ここでは杏子もまた谷での体験をはっきりと記憶していないのだと確かめておこう。

このような体験に見舞われながらも、「あの時ぐらい、杏子は自分がここにあることを鮮やかに感じ取ったことはなかったと言う」。岩の塔を見つめながら、自分の力を岩の中へと注ぎこんでいくうち、谷底の薄暗い光の中で、混じりけのない生命観となつてうつらうつらと成長しはじめ、それにつれて杏子も岩と一緒にうつらうつらと成長する気持を覚えていく。「杏子は幸福を感じた」。

「幸福だつて……」

彼は思わず聞きかえした。杏子はこっくりとうなずいた。彼は半分わかるような気がしたが、またたずねた。

「しかし僕が降りてきた時には、君の姿は充実だとか、幸福だとか、そんな風にはとても見えなかったけれど」

杏子は額に手を当てて考え込んだ。しばらくして彼女はポツリと言った。

「幸福というより、やっぱりつらかったわ。二度とあんな風になりたくない」

杏子がこのように錯綜した口ぶりをする理由は、あとの文章から察せられる。

人間であることは、立つて歩くことなんだなあ、と杏子は思ったという。立ち上がった、どれも自分とひとしい重みをもつ物たちの間で、生意気にも内と外を分けて、遠い近いを分けて、自分勝手な視野をつくって、大きな頭を細い首の上にのせてうつらうつらと歩きまわることなのだ。だけど、内と外を分けたとたんに、畏れが内側に流れこんで、いっぱい満ちて、姿全体にどこか獣くさい感じをあたえる。

「自分」とは「自らの領分」と解することが出来る。さまざまな人々がごったがえす中で、はつきりと自我を持つことの困難、などと言ってしまうと月並みではあるが、杏子はその困難を疑的に解決したという実感があつたからこそ、「幸福」を感じたのだ。しかし、疑似は疑似である。なによりケルンに自分を託した上でそうした感覚を体験したというのなら、二重の倒錯が起こってしまったている。おまけにこの時杏子は「幸福」と隣り合わせの危機にも瀕していたのだが、あらずじを追い直すことで説明できるのでひとまず戻ろう。岩の塔をみつめるうちに畏れはなくなり、自分のありかも確かになってきた。しかし、

まわりの沢山の岩達は、なお銘々が頑固に主張しつづけることで均衡を保っており、杏子は自分もその網の目に取りこまれて、立ち上がるうものなら釣合いは崩れてしまい岩が雪崩れ出してしまうのではないかと考えていた。「幸福」がゆらぎはじめる。

その時、足音が近付いてきた。

足音が近くまで止んだ時、その時はじめて、杏子はハッとした。誰かが上の方に立って彼女の横顔をじっと見おろしている、その感じが目の隅にある。確かにあるのだけれど、それが灰色のひろがりの、いったいどの辺に立っているのか、見当がつかない、見当がつかないから、顔の動かしようもわからない。

「頭をぐるっとまわして見わたしてみればよかったのに」彼はある時杏子に言ってやっ
た。

「それが出来るくらいなら、あんなところに坐っていないかったわよ」と杏子は笑った。

うっかり顔を上げて、もしも人の姿がなかったら、もしも人の姿が前景に立って灰色の傾きを支えてくれなかったら、岩屑がいちどに目の中へ、頭の中へ雪崩れこんできて、それっきり自分はダメになってしまう、そんな気がしたという。

しかし、「彼」は立っていた。

《いるな》と杏子は思った。しかしいくら見つめても、男の姿は岩原に突き立った棒杭のように無表情で、どうしても彼女の視野の中心にいきいきと浮び上がってこない。《いるな》という思いは何の感情も呼び起さずに、彼女の心をすりぬけていった。杏子は疲れて目をそむけた。それから、視線が又こちらに注がれているのを感じて、また見上げた。すると、漠と広がる視野の中で、男の姿がついと動き出した。そのとたんに……

そのことを話した際に、杏子はやさしくて残酷な顔つきになる。杏子は彼の胸に軀を強く押し付けてきて、顔だけを彼の肩からすこし離して、目にいたわりの光を浮べながら、乾いた声で、言葉を少しも柔らげずに喋り出す。

……そのとたんに、杏子は男の姿をはじめて視野の中心に捉えた。男は二、三步彼女に向かってまっすぐに近づきかけて、彼女の視線を受けてたじろぎ、段々に左のほうへ逸れて言った。男は杏子から遠ざかるでもなく、杏子に近づくでもなく、大小様々な岩のひしめく河原におかしな弧を描いて、時々眼の隅でちらりちらりと彼女を見やりながら歩いていく。細長い軀の、背を獣みたいにもつきりまるめて、まるで薄い氷の上をそるそるとわたるみたいに、おさない目もとに不安をむき出しにしている。ところが男が歩いていくにつれて、灰色のひろがりが、男を中心にして、なんとなく人間くさい風景へ集まって行く。そのさまを杏子はいかにも珍しいものを目にする気持で見まもった。あの人はどんなにわが身をいとおしく思っていることだろう、と彼女は驚嘆した。わが身をいとおしく思って、そのために不安に苦しめられて、その不安をまたいとおしく思

つて、岩屑のひしめきにたちまち押し流されてしまいそうなちっぽけの存在のくせして、戦々競々と彼女をよけていく。それでも、そうやって男が歩いていくと、彼女に対しては険しい岩々が、彼のまわりには柔らかに集まって、なま温かい不安のおいを帯びはじめ。杏子はその様をしばらくしげしげと眺めていた。そして男のあまりにも露わなわが身のいとおしさに、あまりにも露わな不安の表情に、まるで夜道で酔漢とすれ違った時のようにおぞ気をふるいながら、《立ち止まって、もし、あなた》と胸の中で叫んでしまった。すると男はいきなり岩の間で立ちすくみ、いったんは逃げだしそうな構えを取ったけれど、やがてぼんやりとこちらを向き、大きくて臆病な獣みたいに潤んだ目でおそろおそろ近づいてきた。

はじめは男の存在を目に留められず、近づいてきてからもその存在が鮮やかになるわけではない情景は、「彼」の視点に映ったものと二重写しになるかのようだ。

「彼」は杏子のもとへとたどりつき、『麓まで連れて行ってください』と言わせる。以降視点は「彼」のもとへと戻り、麓まで下りていく叙述がつづく。

杏子が「彼」に惹かれた理由は、はじめに見当をつけたものとそう変わりはない。岩達のひしめきの中でうずくまり、たとえその中で「幸福」を感じていようと、動き出そうものなら途端に裏切られる危機に瀕した自分を、「彼」は救ってくれた。まさに人間としての自分を証し立ててくれたのである。

おそらく、「彼」なしでは自分の存在を保てなかった、ということ杏子は自覚している。それだけでなく、他人によって自分が証し立てられることへの畏れも、岩場で感じたという「幸福」も考え含めた上では、より強く自覚していると察せられる。救われはしたのだが、杏子は自らを襲った危機から逃れられていないどころか、自覚しているがゆえに危機をいっそう剣呑なものとしているのだ。

こうした両義的な感情は彼女の「病氣」についてもあてはまるのだが、それを語るのには二人の関係についての考察を終えてからにしよう。ともあれ、「彼」が自分を救ってくれたのだという手触りは三カ月経っても忘れられず、駅のホームで「彼」を見かけた瞬間走り寄って行くだけの力ともなった。しかし、いかに自分が病氣なのだと「彼」の前で告白しようと、たとえ『吊橋のように助けてほしいの』と願おうとも、君は病氣だ、自分の存在も一人では証し立てられない、だから僕が救ってあげる、などと言つてのける自惚れた手に、あらがいなく自らの身をゆだねられるだろうか。

杏子の顔つきは濃い影となってわからなかったが、全身が何かを怪しむように静まりかえってこちらをしげしげと見つめている。彼はまどろみの中にまだなけば捉えられていて、見つめかえすことが出来ずに、ただ一方的に見つめられていた。見つめられることの気味の悪さを、彼は知った。ただ一方的に見つめられて、彼の軀はベンチの上でおおよそ無表情な、ただひたすら存在に耽る獣じみた生命へ押し戻されていく。

《あの人に見られていたのか……》という驚きと、そして嫌悪が女の軀にひろがっていく。醜悪な目撃者の眼を潰してやりたい。そんな衝動を彼は思いやった。

しかし、杏子は出会いの実感も手放せない。証拠に、彼女は出会いの場面を反復するかのようになり、二人で立ち寄った河原にてケルンを積む。いわずもがな、「彼」にみつめられていることを知りつつ。

杏子はちようど、しゃがんだ軀の額よりも高くなった天辺のコブシ大の石の上に、又不釣合いに大きな石を両手でのせようとしているところだった。しゃがんだまま腰を軽く浮かして、石を両手で目の上へ差し上げるようにして塔の天辺にそっと近づけ、杏子はふときかん気な目つきになり、その石を天辺の石の中心よりもわざと左へ大きくずらしてのせた。そして両手をさつと離し、軀を低く小さくこごめて、ぐらぐらと左右に揺れる塔を見つめた。

(……)

彼はふと杏子という存在を感じ当てたような気がして起き上がり、杏子のそばに言って、一緒にかがみこんで石の塔をながめた。しばらくして彼は杏子の肩に手をかけて、「おいで。もう帰ろう」と声をかけて立ち上がった。杏子は動かなかった。彼に手を取られてようやく立ち上がった時にも、彼女は石の塔に見入っていた。背中に腕をまわして連れていこうとすると、顔に怯えの影が走った。彼は石の塔のそばに行き、「このままじゃ、だめだね」と言って、石をひとつひとつ降ろして下に積み、低い安定した山をこしらえてやった。杏子はようやく軀をほぐして歩きはじめた。

こうした「彼」の目を引くために自分の不安定ぶりをさらけ出す姿は、媚態とも受け取られかねない。しかし、杏子は「彼」との関係を続ける中で、待ち合わせの場所はかならず最初に二人で訪れた「薄暗い喫茶店」に限ったり、軀を交えるならば街中の宿を避けて郊外の古ぼけた屋敷に移るよう「彼」に願ったりといった、谷底での風景を反復するかのとき態度を見せるのである。それを見まもりながらもなお、媚態などという悪し様な言い草が吐けるだろうか。

作品全体を通して、杏子は谷底での体験を何度も繰返す。一人で繰返すのではなく、「彼」と繰返す。たとえ一人で部屋にこもろうと、後日「彼」に報告する。そこで感じ取ったものを「彼」に逐一告げ知らせる。あたかも谷底での体験が本物だったかと量るかのようになり。あの時「彼」と手をたずさえた時の感触は今も自分にとって疑いのないものなのかと確かめるように。あの時自分の手を取ってくれたのはこの人だったのだろうかと見定めるように。

杏子は「彼」の視線を繰りいれることで自分の感情を確かにするとともに、「彼」の輪郭をも確かにしようとしているのだ。

あえて言いきってしまえば、谷底で杏子を救うことは誰にでも起こしえた。その時点で「彼」特有の何かを杏子が見出した様子もないし、以降の展開を眺めてみても杏子がそれを明かす場面はない。だが、自分が一度しか体験しなかったあやふやな記憶を鮮やかにしてくれるのも、あの時同じ道を通って谷へと下りてきた、他ならぬ「彼」しかないのである。

自分に降りかかったことを必然だったと受け取り直す。この恋は運命なのだというような定型句ではない。そもそも各人の体験はどんな事柄であろうと各人にしか体験することのできないものだ。さりとて、時に人は体験を疑う。もしああすればあんなことは起きなかつたのではないか、あそこでああなつたのは私でなくてもよかつたのではないか……そういう迷いを振り切ろうとするために、杏子ははじめから揺るがしようもなく起きた必然を必然として受け取り直しているのだ。

杏子は、確かな想いや理由（原因）がありそれを確かなものとした上で連れ添う（結果）までに至るといふ道行きとは、いくらか違つたものをたどる。はじめに「彼」は自分とつてかけがえのない存在になつたという結果がある。しかもそれが「彼」と連れ添う原因と一体になつている。原因が結果と一体になつているからには、結果を繰り返さなければ原因も確かなものとはならないし、自分たちが今連れ添つている根拠にもならない。そんな論理が杏子の行動原理を規定しているのである。

それだけではない。思い出そう。「彼」もまた初めに杏子というかけがえのない存在を見出して、「彼」にしか抱けない感情を芽生えさせていたことを。そのかけがえのない記憶を意識の有無にかかわらず何度も反復しながら、そこで得られた手触りを鮮やかにしようとしていたことを。原因と結果が一つになつた体験という起源を繰返しやり直していたことを⁴。

思えば、世間にひろく見られる恋人達もそうではないか。連れ添うという行為は結果ではないのかもしれない。本来結果と呼ぶべきは相手を好きだと思いはじめ、原因が生じた時点なのかもしれない。そこで彼らは原因と結果が一体になつた、特別な関係を取り結ぶ。そして彼らが二人だけで連れ添おうと申しこむ時には、こゝ言外に述べているのかも知れない。私にとつてあなたはかけがえのない存在なのだ、だからかけがえのない存在と同

この視点を通せば、初めのころに引用した、二人が二度目に軀を交える前の「彼」の心理が示すところも明らかになる。そもそも二人が初めて軀を交えた時にはこゝ説明されてきた。「肉体的な衝動に駆り立てられた覚えもほとんどなしに、まるでそうでもしなければ杏子の感覚の昏乱の中でお互いの関係が保てないともいうように、彼は杏子の軀にふれることになつた」。こゝには自分が杏子の軀を求めるのは自分が杏子を求めていると信じているからだ、という同語反復にも似た心理がある。「彼」は杏子との関係という事実を追認するために軀を交えたのだ。この根拠がないに等しい行為の奇怪さは、二度目に交わる頃には、杏子の軀を求めるのは杏子の軀を求めたからだ、という形で一層強められる。が、そこで軀を交える理由となつている杏子との関係や、杏子との交わりは不安定なものだった。だから「彼」は世間という外部から情欲の典型を借りようとしたのである。

士にふさわしい付き合い方をしよう……こうしてみると連れ添うという恋愛の形は、世間から借りてきた標識のようなものなのかもしれない。この人は私にとってかけがえのないものだから横取りしてはいけない、とでもいうような。

しかし、だからといって「彼」と杏子には標識は不要なのだ、とは結べない。標識無しの彼らの関係は不安定なのである。だからこそ時に世間並の情欲を借りようとするし、病気を治そうという思い上がりの力をも必要するのだ。とはいえ虚飾は虚飾だから剥がれるのも早いし、何より彼らにとっては居心地の悪いものでしかない⁹。そして彼／彼女の中心にある、自分、相手、世間、そのどこにも属することのできない居心地の悪さをなぞれた時、二人は向きあうことが出来る。

「そうね……あなたには、あたしのほうを向くとき、いつでもすこし途方に暮れたようなところがある。自分自身からすこし後へさがって、なんとなく希薄な、その分だけやさしい感じになって、こっちを見ている。それから急にまとわりついてくる。それでいて、中に押し入ってこないで、ただ肌だけを触れ合って、じっとしている……。いつも同じだけど、普通の人みたいに、どぎつい繰返しじゃない」

彼はそうではない時の自分の姿を思った。杏子のそばにいながら自分ひとりの不安に耽って、無意識のうちに同じ癖を剥(む)き出しにして反復している獣じみた姿を……。そして彼のそばで眉をかすかに顰めてそれに耐えている杏子の姿を思いやった。しかしその思いは胸の中にしまつて、杏子の差し出した言葉を彼はそのまま受け取った。

「入りこんで来るでもなく、距離を取るでもなく、君の病気を抱きしめるでもなく、君を病気から引張り出すでもなく……僕自身が、健康人としても、中途半端なところがあるからね」

「でも、それだから、ここでこうやって向かいあつて一緒に食べていられるのよ、あたしいま、あなたの前ですこしも羞(はず)かしくないわ」

(……)そうして薄暗がりの中で二人して同じ反復に耽つていると、軀を合わせている時よりも濃い暗い接触感があった。しかしそれをお互いに見つめあう目がのこつて、暗がりの中に並んで漂つて、お互いのおぞましさをいたわりあった。二度と繰返しのきかない釣合いを彼は感じた。

(……)

「ああ、美しい。今があたしの頂点みたい」

杏子が細く澄んだ声でつぶやいた。もうなかなば独り言だった。彼の目にも、物の姿が

⁹これに絡めて付言しておきたい。本稿の論旨は言葉ならぬものこそ大事なのだと言つてころにある、と受け取らないでもらいたい。そもそも言葉にならないものとは、言葉がなければ視野にのぼってこない。言葉以前の領域での苦悩もまた、言葉との葛藤があつてこそ成り立つ。そしてみつめるべきは、目の前に佇む二つの問題をどう軋轢なく折り合わせると悩んでいる、双方の間に滞るものなのだ。

ふと一回限りの深い表情を帯びかけた。しかしそれ以上のものはつかめなかった。帰りの事を考えはじめた彼の腕の下で、杏子の軀がおそらく彼の軀への嫌悪から、かすかな輪郭だけの感じに細っていった。

*

以上が「彼」と杏子の、二人だけにしか作り出せない、固有のものと呼ぶことさえはばかられるかけがえのない関係である。こうしてみれば初めに立てた見当——「精神に異常をきたした女を男が庇護する恋愛小説」——が作品の一面しか切り取っていないなかつたと知れるだろう。彼らは世間並の恋愛関係を営んでいるとは言えないし、男が女を庇護しているのは外面だけなのである。

初めのころは確かな恋愛感情を打ち立てるもの、お互いを見つめる間に相手のはつきりとした自我とすれ違いが起こり、関係に亀裂が生じる、といった筋立てではないのだ。彼らの関係は初めから壊れている。相手に自らの身をゆだねきれないでいる。一度ゆだねきったのだという結果があるにもかかわらず、あたかも別人が起こしたことのように受け取り、結果を信じきれないでいる。ましてやこの関係が恋愛であるなどとは思ってもよらない。さらに、彼らははつきりとした自我をもっているわけではない。自我は相手との関係によって成り立つのだ。

これこそが恋愛なのだと定義しようと思えば、いくらでも論を尽くすことが出来るだろう。しかしそうしてみたところで、この小説が恋愛さえその一部とするような、彼らが彼ら自身として存在することの問題をこそ重く取り扱っているのだという事実は揺るがしやうもない。

とはいえ、まだ終わらない。この一筋縄ではない小説を分析してみて、さらに疑問が立ちあがってくる。主題として打ち立てられていたはずの「恋愛」が虚飾であったとわかったからには、細部においても仮面をつけているのではないか、と。男が実は庇護者ではないとわかった、それならば女のほうは「精神に異常をきたした」ままで良いのだろうか？ 杏子は本当に「病人」なのだろうか、と。

我々はいまだ関係の固有性を汲みあげたにすぎないのであり、固有性の問題にとりつかれるからには『杏子』という小説自体の固有性にも執着しなければならないのだ。

(つづく)